

ボア戦争と日英文化人

| | |
|-----|---|
| 著者 | 藤田 緑 |
| 雑誌名 | 国際文化研究科論集 |
| 巻 | 1 |
| ページ | 17-36 |
| 発行年 | 1994-03-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/34397 |

ボーア戦争と日英文化人

藤 田 緑

はじめに

「世紀末」という言葉を聞くと、退廃的な雰囲気の中にも、「成熟した芸術」、あるいは「文化咲き乱れる」といった時代を連想することが多い。おそらくこれが一般的な「世紀末」の印象なのだろう。だが、目をヨーロッパ、アメリカの西側諸国から途上国へ転じてみると、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのこの時期が、まさに列強による弱小国侵略の時代であることが明かとなる。

ざっとみただけでも、1874年第四次英国アシャンティ（現ガーナ）戦争、1878年第二次アフガン戦争、1879年英国ズールー（現南アフリカ）戦争、1880年第一次ボーア戦争、1881年にはスーダンでマハディ革命が始まり、1883年に英国と衝突（85年カルツームでゴードン將軍死亡）、1882年には仏国がハノイを、英国がエジプトを占領、1888年英チベット侵入、1895年伊エチオピア侵略、1898年ファシヨダ事件、1899年第二次ボーア戦争が相次いで起こっている。つまり、第三世界にとっての世紀末とは祖国喪失の時代であった。

19世紀が終わるその直前に始まった第二次ボーア戦争は、南アフリカの局地紛争でありながら、広く欧米諸国を巻き込んだこと、軍人、政治家、文学者らの多くの著名人を生んだ、あるいは著名人がかかわった戦争であった。同時に来たるべき20世紀を特徴づける出来事をいくつか胚胎していた。もちろん、その他の戦争が白色人種対有色人種の戦いであったのに対し、ボーア戦争が The White Man's War（白人同士の戦争）であったことは言うまでもない。

本稿は、アフリカ大陸の南端で起こった第二次ボーア戦争（以後ボーア戦争と略す）が文学を中心に戦争当事国であるイギリスと、一見ボーア戦争とは無関係に見える極東の日本でどう取り扱われたかについて詳らかにし、これまであまり注目されることのなかったボーア戦争の文化史的側面、大衆文化に及ぼした影響に焦点を当てたい。同時にイギリス、南アフリカ、日本それぞれの19世紀末から20世紀初頭の民族主義を再考するものである。

1. ボーア戦争概観

ボーア戦争という呼称はイギリス側の用語である。ボーア⁽¹⁾という言葉がもはや南アフリカ国内ではほとんど使われていないのと同様、南アフリカの史書は1880年から1881年の第一次アングロ・ボーア戦争をトランスバール独立戦争、1899年から1902年までの第二次アングロ・ボーア戦争を南

アフリカ戦争、または第二次独立戦争と呼んでいる。

1899年10月11日、ボーア軍側からの攻撃によって火蓋がきられたボーア戦争は、最終的に英国側が陸軍45万人を投入し、ボーア側の兵力約9万人⁽²⁾を撃ち破って1902年5月31日に終わった。この2年7か月に及ぶ戦争は、その戦争形態の変化から通常二段階に分けられる。すなわちイギリスによる南アフリカの二つのボーア人国家、オレンジ自由国、トランスバール共和国の併合（1900年5月、9月）と、トランスバール共和国大統領ポール・クルーガーの国外脱出（1900年10月）までを第一段階とし、戦況が不利となったボーア側が通常戦からゲリラ戦に戦略を切り替えた時点から第二段階が始まる。イギリス側はゲリラ作戦による執拗な抵抗に対して、破壊作戦とボーア人婦女子の強制収容所連行という強硬手段を講じた。ボーア人の財産である農場3万軒、羊3万6千頭が焼失した⁽³⁾。戦場となったオレンジ自由国、トランスバール共和国の様子をイギリス軍人の一人はこう書き残している。「国は今や完全な荒地となった。何マイル行っても、事実何週間進み続けても、一向に生物を目にすることはなく、ただ荒廃した焼野原があるのみである」⁽⁴⁾。強制収容所における伝染病（主としてはしか、結核、チフス、赤痢）の蔓延と食糧不足から2万8千人のボーア人が死亡、そのうち約8割を16才以下の子供が占めた⁽⁵⁾。収容所での死亡率の高さが、ボーア側にそれ以上の抵抗を断念させる結果となったが、ボーア側に英国に対する深い怨念を残したことは言うまでもない。イギリスがこの戦争で世界的な批判を浴びたのは、破壊作戦もさることながら、戦闘には直接関係のない女性、子供を強制収容し、しかもボーア人戦死者総数7千人⁽⁶⁾をはるかに上回る約3万人の犠牲者を非戦闘員から出した非人道的な行為のためである。戦争終了時、強制収容所にいたボーア人は約12万人⁽⁷⁾にのぼった。ボーア戦争が白人主役の戦争であったことから見落とされがちであるが、その時同様に約10万人のアフリカ人もまた白人とは別の施設に収容され、そのうち約1万4千人が命を落とした⁽⁸⁾。

ボーア戦争が世界の耳目を集めたのは、アフリカ大陸の南端にある一小国が、世界に冠たる大英帝国を相手に戦争を仕掛け、戦いぬいたことにあった。その行動はheroic resistance、英雄的抵抗と称され、世界の同情、共感を喚起した。そのことは、ボーア人に加担した義勇兵の多さ⁽⁹⁾に如実に現われている。ドイツ、オランダからの参加がもっとも多かったのは、ボーア人の移民から国家建国にいたるかかわりの深さから容易に頷けるが、その他にイタリア、フランス、ポルトガル、アメリカ、ロシア、ハンガリーからの参加⁽¹⁰⁾があった。この中にはヴィンセント・ヴァン・ゴッホの兄弟のコル・ヴァン・ゴッホ（捕虜となり、のち自殺）やローマ法王レオ13世（1873-1903）の甥にあたるイタリアのベッシ伯爵、ハンガリーのフォン・ゴルデック男爵、飛行船のドイツ人発明家フェルディナンド・グラフ・フォン・ツェッペリンの親類のフォン・ツェッペリン伯爵（戦死）の名前をみることが出来る。のちのスペイン内戦とよく似ていた。

しかし、これら個人レベルにおける参戦と、欧州各国によるイギリスに対する非難はあったが、国家としてイギリスと武力衝突を覚悟のうえで戦争に実質的に介入した国はなかった。ボーア戦争

の従軍記者から捕虜となり、劇的な脱走で名を馳せ政界入りしたウィンストン・チャーチルは、まだ戦闘が続いていた1901年1月23日、議会での処女演説でボーア人について次のように述べた。「これほど同情を集めながら支援を受けなかった民族はない」⁽¹¹⁾。

2. 英国の誤算

ボーア戦争の発端は南アフリカでダイヤモンドと金が発見されたことにある。1814年に始まった英国のケープ地方支配を逃れて、ボーア人は1830年代に入るとケープから内陸部へと北進を始め、1852年にトランスバール共和国、54年にオレンジ自由国を興す。しかし1867年にオレンジ自由国とケープ植民地の国境が接するグリカランド・ウェスト地方キンバリーでダイヤモンドが発見されると、イギリス、オレンジ自由国、グリカランド・ウェストの三者間で土地の所有権をめぐる激しい紛争が起きた。複雑な経緯は省き結果だけを述べれば、1876年英国はオレンジ自由国に当時の金額で9万ポンドの補償金を支払いキンバリーをケープ植民地のものとした。さらに翌77年トランスバール共和国に対しても一方的にイギリスへの併合を宣言する。そこで起きたのが1880年10月から1881年8月までの第一次トランスバール独立戦争であった。この戦争は実質3ヵ月間の戦いでボーア側の勝利となったが、和平協定では併合によって一旦否決された自治権が「英国主権のもと」での復活となった。この「英国主権のもと」が後に大きな意味を持つようになる。1886年トランスバール共和国のウィットウォーターランドで巨大な金脈が発見され、英国はまさに金のなる土地の収奪に再び乗り出す。

ダイヤモンドと金の発見は、南ア社会に構造的変革をもたらした。経済は農業依存型から工業主導型となり、黒人は貨幣経済のなかに組み込まれていった。両鉱物資源が南アで発見されなかったら、英国は南アにさしたる興味を示さなかっただろうし、従って戦争も、現在アフリカーナーと呼ばれるボーア人と英国系住民との抜き差しならぬ対立も、後のアパルトヘイト政策による黒人差別もこれほど徹底的なものではなかったかも知れない。

ボーア戦争が1899年10月に始まったとき、イギリスはクリスマスまでには決着がつくと、たかを括っていた。ヴィクトリア女王の即位60周年記念祝典で、海外の自治領、植民地から駆けつけたエキゾチックな兵隊の行列が、大英帝国の威信をいやが上にも英国民に印象付けたのはわずか2年前の1887年6月である。英国の覇権は永遠に続くと思われていた。ましてや今度の戦争の相手はアフリカの小国である。英国軍の立上りが悪く、クリスマスまでにプレトリアを陥落させることは出来なかったが、年が変わって徐々に戦況は勝勢に転じ、ボーア側に包囲された都市の奪回にも成功した。ロンドンではマフェキング (Mafeking) 奪回のニュースに市民がピカデリー・サーカスに集まり大々的に祝った。お祭騒ぎをする maffick という言葉はそこから生まれたものである。

この勢いに乗じて与党統一党は絶対多数の確保を目的に議会を解散し、総選挙を行った。俗に言

われる「カーキ選挙」である。カーキとはボーア戦争で兵士たちが着用した軍服のことを指すが、夏涼しく冬暖かいことからそれまでもインドに駐留するイギリス軍で一部使用されていた。語源はペルシャ語の「埃」である。イギリスが楽観的でありえたのはその頃までで、戦闘は思いがけず2年6ヵ月以上にも及んだ。イギリスは45万の兵力と2億2200万ポンドの戦費を費やし、戦死者5700人、戦病死者1万6千人、戦傷者2万2800人⁽¹²⁾という大きな犠牲を払って、1902年5月31日、フェレイナハンク講和条約で辛うじて勝利を手にした。勝ってはみたものの、実質的には二つのボーア人民共和国の自治を早期に許す結果となったことから、負けたも同然なのは誰の目にも明らかだった。その結果、英国はSplendid Isolation（光栄ある孤立）政策を放棄し、1902年に日英同盟を結ぶにいたる。東アジアを確保する力を、英国が失ったからである。

英国の属領だったニュージーランド、オーストラリア、カナダからは2万5000人⁽¹³⁾が、南アへ派遣された。オーストラリアでは若い男性の50人に一人は南アでの兵役を志願した⁽¹⁴⁾。ロンドンでもロンドン市帝国義勇兵団が組織された。ディズレイリの「特権階級と庶民は二つの国家を形成している」という言葉が依然として生きていた英国にあって、あらゆる階級の人々がひとつの戦力となったのは、それまで例をみない画期的なことだった。

3. 文化人群像

イギリスの文化人は様々なかたちでボーア戦争にかかわった。小説家、と言うよりは今日ではキングコングの生みの親といったほうが通りのよい若きエドガー・ウォーラス（Edgar Wallace）、『帝国主義論』を著す直前のJ.A. ホブスン、そしてウィンストン・チャーチル、彼らはみな特派員として南アに派遣された。オクスフォード大学を出たばかりのジョン・バカン（John Buchan 作家、後年カナダ総督）は南ア長官ミルナーの私設秘書を2年務めた。すでに作家として名声を博していたコナン・ドイルは義勇兵を志願するが、40歳という年令のため不合格となり、結局ドイルの友人が設立する野戦病院の事務長兼外科医として南アに赴く。アルガーノン・スウィンバーン（Algernon Swinburne）は戦争が勃発した翌日の『タイムズ』紙に『トランスバール』という表題の詩を発表、ボーアを大波が押し寄せて呆然としている犬に例え、「英国よ、戦え。決定的な一撃を加えよ」と戦意をあらわにした。アルフレッド・オースティン（Alfred Austin）もまた1899年11月2日付の『タイムズ』紙に英国を野蛮人に包囲されたローマ帝国になぞらえた詩を発表した。大方の予想に反して英国が苦戦を強いられるとヘンリー（W.E. Henley）は『諫言』という詩のなかで「一体我々の昔ながらの誇りはどこにいったのか・・・英国よ立て、立ち上がれ」と士気を鼓舞する（1899年12月）。

戦争に反対する声もあった。トーマス・ハーディが『文学』（1899年11月25日付）に発表した詩『死んだ鼓手』（後『鼓手ホッジ』に改題）では、若い農夫が何故南アに行ったのかもわからないま

まに殺され、死体が葬られることなく放置されている様を嘆き、戦争の無意味さを訴えた。当時を代表するジャーナリストであった W.T. ステッドは一貫して反戦を唱え、『南アフリカでの戦争に反対する戦争』という週刊紙を発行した。近代社会主義の母と呼ばれたビートリス・ウェッブ、将来の二人の英首相、ヘンリー・キャンベルーバーナマン、デイビッド・ロイド・ジョージも終始反対の立場を取った。逆に何といたって積極的にボーア戦争に関与したのは、英国ですでに確固たる文学者としての地位を築いていたルディヤード・キプリングをおいて他にいない。

ボーア戦争直前の1899年9月29日、『タイムズ』紙には、イギリス人からみた南アの状況をうたったキプリングの詩『古きことがら』が掲載される。そのなかでキプリングは間接的にクルーガーのことを sloven, sullen, savage, secret, uncontrolled⁽¹⁵⁾, 「だらしなく、鬱々としていて、野卑で、秘密裏にことを運び、抑制がきかない」人物と描写するが、この「だらしなく、鬱々として、野卑」というのがその後ボーア人のイメージとして長く定着することになる。勿論、その前からボーア人のイメージがよかったわけではない。第一次ボーア戦争以降、彼らは決まって英国人の対極的な存在として、すなわち不潔で狡猾で墮落したものとして描かれた。ボーア人の共和国であるトランスバルでは1886年ウィットウォーターランドで金脈が発見されて以来、一攫千金を夢見る男たちがイギリスはもとより、他のヨーロッパ諸国、オーストラリア、北アメリカ等世界中から集まり活況を呈する。南アの経済活動の中心地となったヨハネスブルグはその時期に建設され、急成長を遂げた都市だが、彼ら外国人—その大半は英国人であった—は、参政権も市民としての権利も与えられず、重い納税の義務だけが課せられていた。これがトランスバルの主要な財源となり、共和国政府はそれをもとに武器を大量に買い付け、有事に備えた。キプリングも前述の『古きことがら』のなかでこう告発する。

He shall take a tribute, toll of all our ware;

He shall change our gold for arms - arms we may not bear.⁽¹⁶⁾

貢物を求められ、物を運べば金をとられ、私たちの金で武器が掻き集められる—

武器は私たちのものではない。

外国人＝非ボーア系白人に参政権を付与する条件として、トランスバル大統領のクルーガーは共和国在住7年を、英国側は5年を頑として譲らず、結局、クルーガーと英国側との話し合いは決裂した。トランスバルの英国人は「奴隷」状態に置かれているという南ア長官ミルナーが英政府に送った長文電報、当時の植民相チェンバレンの好戦的姿勢などがありまって、最終的には戦争に突入することになるのだが、とりわけ「一見逆説的なようだが、我々の臣民を保護する唯一の効果的な方法が我々の臣民の国籍離脱を援助することだ、というのは真実なのである」⁽¹⁷⁾という文面で

始まるミルナーの「奴隷電報」の果たした役割は大きかった。それまで戦争は避けるべきであるとしてきた世論を一気に覆し、戦争賛成、反ボーアの気運が高まった。ボーア戦争が一名「ミルナーの戦争」と呼ばれるのはそのためである。

4. 「心ここにあらず」

1899年10月31日付ロンドンの新聞『デイリー・メール』紙にキプリングの次のような詩が掲載された。少し長いが全文を訳して紹介しよう。

心ここにあらず

ルール・ブリタニアと叫んだら
「女王陛下万歳」を歌ったら、
口でクルーガーを殺し終えたら、
私の小さなタンバリンに1シリング硬貨を入れてくれませんか
南行きを命令された^{カーキ}軍服を着た紳士のために。
彼は心ここにあらず、弱点だらけー
けれども我らもボールも彼を見つけたら
わかってあげなければ。
なにかを帳消しにしようと、
彼は向うで頑張っている。
故郷に愛しい者をたくさん残して。

公爵の息子、コックの息子、大勢の王たちの息子。

(テーブル湾に向かう五万の騎馬兵)

一人一人が祖国のために働いている

(それでは誰が家族の面倒をみるのか)

名誉にかけても帽子をまわして、

募金だ、募金だ、募金をしたまえ。

懇願したり口外するにはあまりに誇り高き多くの家族がいる。

彼らは粗末な家具や寝具を質にいれ

週に一度きちんと支払われる僅かな給金で生活をするのだろう。

というもの、稼いだ本人は従軍しているのだから。

彼は心ここにあらず、
でも国家が呼ぶのは聞こえた。
しかも彼を見つけにわざわざ連隊を送る必要はなかった。
彼は仕事を辞めて、参加した—
だから我らの目の前の仕事は、トミーが後に残した家庭を助けることなのだ。

公爵の仕事、コックの仕事、庭師、準男爵、馬丁。
うまや、宮殿、あるいは紙屋—誰かが出掛けている。
一人一人が祖国のために働いている
(一体誰が部屋の面倒をみるのか)
名誉にかけても帽子をまわして、
募金だ、募金だ、募金をしたまえ。

後で彼の顔を面と向かって見られるように
なんとかしようではないか。
そして、彼にこう言おう
—いちばん彼が聞きたいことを—
君が帝国を守っている間
雇い主は君の仕事をそのまま確保し、
仲間(すなわち君と我)は、彼女の面倒をみていたよと。
彼は心ここにあらず、だからすっかり忘れてしまうかもしれない。
けれども我らは彼の子供らにこういってもらっては困るのだ、
パパがポールをたたきのめしている間に、僕らを救貧院に送り込んだのは
あの人たちだったんだなんて。
だから、トミーがあとに残した家族を助けよう。

コックの家、公爵の家、百万長者の家。
(テーブル湾に向かう五万の騎馬兵)
一人一人が祖国のために働いている
(一体何を君は出来るか)
名誉にかけても帽子をまわして、
募金だ、募金だ、募金をしたまえ⁽¹⁸⁾

人々は単にポール・クルーガーを非難するだけだが、若き理想に燃えるトミーは大切な仕事を放り投げ、いとし妻、恋人、家族を残して単身南アフリカへ行き、「ポールをたたきのめ」そうと躍起になっている。軍隊の報酬は低く、そのうえ戦争に心を奪われて送金を忘れることもあるトミーにかわって、国民一人一人が出来ることは何か。不自由の無いよう従軍兵士の家族の面倒を見ることである、というのがこの詩の主題である。コックの息子から、馬丁、庭師、百万長者、公爵にいたるまであらゆる階級に連帯感を持たせ、一丸となって大英帝国のために身を挺する必要性を訴えている。キプリングが有名な『白人の責務』*The White Man's Burden* を『タイムズ』紙に発表したのは8ヵ月前の2月である。彼にとってボーア戦争もまた「平和のための野蛮な戦争」⁽¹⁹⁾のひとつであったに違いない。ただし、『白人の責務』が白人による非白人世界の文明化の責任を説いた、いわば一般論であるのに対し、『心ここにあらず』*The Absent-Minded Beggar* は、南アというより特定された地域の募金という、特定された責任を歌っているのが特徴的である。

キプリングは『デイリー・メール』紙の社主アルフレッド・ハームズワース本人から、出征兵士の家族への募金運動のために詩を書いてほしいと要請された。その背後に創刊4年目の新聞の発行部数を増やす目論みがあったことは言うまでもない⁽²⁰⁾。もともとハームズワースはキプリングに1万ポンドを出して従軍記者を依頼したが、キプリングがそれを断り、そこで詩による貢献となった。

『心ここにあらず』の発表直後の評判はあまり芳しいものではなかったらしい⁽²¹⁾。まもなくこの詩に当時の人気作曲家であったサー・アーサー・サリバンが曲をつけることになったが、彼の「このような退屈なものには曲を書きにくい」⁽²²⁾という言葉からも評判を窺い知れよう。しかし、彼の予想に反してこの歌は人々の琴線に触れ、広く膾炙される場所となる。1899年11月13日、新聞に掲載されてほぼ2週間後にロンドンのアルハンブラ劇場で初演、成功をおさめる。よほどその時の聴衆の反応がよかったのだろう、歌手リリアン・ラングトリーは自ら100ポンド⁽²³⁾を支払い舞台で歌う権利を買った。それ以後『心ここにあらず』は劇場やミュージック・ホールで、歌として歌われ、また詩が朗読された。女優ビアボーム・トゥリーはパレス劇場で14週間毎日この詩を朗読し、「募金だ、募金だ、募金をしたまえ」の箇所に来ると、客席からステージに向かって降るように硬貨が投げ込まれ、彼女一人で7万ポンド⁽²⁴⁾を集めることができた。

ミュージック・ホールでのヒットはこの詩の流行の火付け役となった。1880年代ミュージック・ホールの数はロンドンだけで大小合わせて500館を下らなかったといわれ、1890年代には約35館の大ホールで毎晩平均4万5千人の観客を集めていたほどだった⁽²⁵⁾。客席と舞台が一体となつてのコーラスが、人気の的であつたらしい。入場料を払うときに手渡される当日のプログラムには歌詞が印刷され、それを口ずさむことを、客たちは何よりも楽しみにしていたからである⁽²⁶⁾。

そればかりではない。キプリングは、彼の詩が募金のためである限りその使用を制限しなかったため、絹、サテン、麻などの布地をはじめ、ありとあらゆるものに歌詞が印刷され、枕カバーにまで登場した。

もう一つこの歌が普及した理由として、ピアノ生産台数の飛躍的な増加が挙げられよう。1870年から1910年間に販売台数は5倍となり、1900年頃は年間10万台⁽²⁷⁾に達していた。『心ここにあらず』に限らず戦争応援歌があらゆる階層に浸透したのは、生産技術の向上と消費パターンの変化が関係している。

ボーア戦争グッズも登場した。キプリングの詩にやはり当時の人気イラストレーター、戦争をヒロイックに描くことで定評のあったリチャード・ケイトン・ウッドヴィルが、頭に包帯を巻き、両足を踏みしめ銃を構えているトミーの絵「軍服の紳士」を描いた。トミーことトーマス・アトキンスとは、1815年、英国陸軍の法規に兵士名の例として使用されたもので、以来、陸軍兵士の代名詞となっていた。この負傷したトミーのイラストも人気を呼び、絵はがき、灰皿、シガレットケース、お皿、ティーカップ、水差しなどに絵柄として好んで使われた。21センチメートル大のブロンズ像も造られた。またイラストのタイトル「軍服の紳士」、「A Gentleman in Khaki」（勿論これは『心ここにあらず』の一節からとられている）も流行語となった。

ボーア戦争グッズは、他にもたくさんあった。たとえば、ユニオン・ジャックやブーラー、ロバート両総司令官、クルーガーの似顔絵等が描かれたハンカチ、トランプ、南ア戦争宣戦布告の文字や、「英国は国民一人一人が義務を果たすことを期待する」と書かれた飾り皿、将軍や政治家の胸像などである。これらは英国ばかりではなく、南アの英国人にも人気があった。ボード・ゲームにもボーア戦争は格好の材料を提供した。19世紀初頭からこの種のゲームはあったが、高価だった。それが、大量生産が可能になった19世紀後半に大流行となった。スライドや短い映画フィルムが盛んに活用されだしたのもこの頃で、「女王陛下の兵隊」、「英国人とボーア人」といったタイトルがつけられたスライドのセットは飛ぶように売れ、戦争の実写フィルムはミュージック・ホールや教会で上映された⁽²⁸⁾。

『心ここにあらず』のヒットは英国にとどまらず、オーストラリアにも及んだ。1900年1月、オーストラリア諸都市の劇場では一斉に『心ここにあらず』を上演中の芝居に挿入することを始め、阿德レードの劇場では4月に戯曲化された『心ここにあらず』が公開された⁽²⁹⁾。アメリカでも詩が雑誌に掲載された。

「心ここにあらず基金」は最終的に34万ポンド⁽³⁰⁾も集めた。この金額の中にはキプリングとサリバンが寄付した原稿料、作曲料がそれぞれ250ポンド、100ポンド含まれている。キプリングはこのボーア戦争への貢献からその年の12月にナイトの称号を与えられることとなるが、「無いほうがもっと良い仕事出来る」といって辞退した。翌1900年1月20日厳しいロンドンの冬を暖かい南アで過ごすため、キプリングは家族とともにケープ・タウンに向かった。

5. 南アフリカのキプリング

1900年2月5日、キプリング一家は無事ケープ・タウンに到着し、大海原を一望に見下ろす高級ホテル、マウント・ネルソンに落ち着いた。キプリングにとっては3度目の南ア訪問だった。2ヵ月あまりの滞在期間中、キプリングは精力的に活動した。まずケープ・タウンにある陸軍病院を視察も兼ねて何度も慰問し、極端に不足していた包帯や兵士らの必需品であった煙草、雑誌等を自ら手配しては届けた。レドバース・H・ブーラーのあとを受けて総司令官として出発する前日、フレデリック・S・ロバーツはキプリングに会い、彼に移動の自由を保証する通行証を与えていた。それを利用してキプリングはケープから北東約650マイルの前線に最も近いモデル・リバーまで行き、負傷兵を乗せた傷病者輸送列車で帰ってくるという経験もした。帰りの列車のなかで彼は家族に手紙を書きたいが書けない者のために代筆をし、彼らの名前のあとに署名をした。彼のサインが幾らかのお金になることを承知していたからである⁽³¹⁾。

苦戦しつつも英国に運が向きだした。3月13日ロバーツ將軍はオレンジ自由国の首都ブルームフォンテインを制圧、翌日新聞社2社のうちオランダ人が所有する反英の『エクスプレス』紙を差し押えた。また親ボアの英国人が経営する『自由国の友ブルームフォンテイン・ガゼット』社⁽³²⁾が軍用に徴用された⁽³³⁾。さらに南アに駐在する優秀な新聞記者4人⁽³⁴⁾が呼び寄せられ、駐屯期間中の兵隊の士気の向上と同時に英国支配へのスムーズな移行をはかるボア人対策として新聞 *The Friend* が3月16日刊行された。紙面では英語とオレンジ自由国の公用語であるオランダ語の二つの言語が使用された。現在の南アの公用語の一つであるアフリカーンス語は当時、農民の言葉として一段低く見られていた。ボア人のエリートは英国で高等教育を受け、日常は英語を使用していたが、国民感情がそれとは別であったことは言うまでもない。英国側はボア人を招待してパーティや晩餐会を催し、広場では毎晩バンド演奏を行って⁽³⁵⁾ボア人の反英感情を少しでも和らげようと努めた。ボア戦争が英国であらゆる階級を超えて、ひとつの連隊が組まれた最初の戦争であったことはすでに述べたが、徴用新聞が発刊されたのも英国のみならず世界でボア戦争がはじめてのことだった。

1900年3月15日には武器を捨てるならば家に帰っても良いという寛大な恩赦の宣言が、オレンジ自由国市民に対して行なわれた。同日、ロバーツはビクトリア女王に宛てた手紙のなかで「戦争は間もなく満足な結果に終わるであろう」⁽³⁶⁾と、きわめて楽観的な見解を示した。これが大きな誤算であったことは歴史が証明している。帰郷すると称して一旦ブルームフォンテインを離れたボア人の多くがゲリラ戦士として戦線に復帰することになるからである。英軍の首都占拠をボア人はこう受けとめていた。「この戦争は陸軍の戦争ではなく、人民の戦いなのだ・・・戦争はまだ始まったばかりだ。」⁽³⁷⁾

キプリングはさっそく編集スタッフの一人から『フレンド』紙第2号に寄稿を求められた。その

日がちょうどセント・パトリックス・デイに当たっていたため、英軍のなかのアイルランド兵⁽³⁸⁾の勇敢さを讃える詩を急いで書き送った。タイトルもそのまま『セント・パトリックス・デイ』⁽³⁹⁾と付けられたその詩が掲載された当日、キプリングは今度はロバーツ將軍からぜひ編集を手伝って欲しい旨の電報を受け取る。4日後の3月21日彼はブルームフォンテイン入りし、早々に仕事を始めた。編集、記事の執筆、詩や格言の創作、校正、時には植字にまで積極的に取り組んだ。キプリングの参加により兵士からの投稿—大半がキプリングの作品を真似たものであった—が殺到した。編集スタッフの一員のアメリカ人特派員は、英国軍は詩人の集まりかと揶揄したほどだった。キプリングは兵士の作品を稚拙であっても手を加えずにそのまま掲載すべきだと主張した。彼は新聞社で十余年ぶりに仕事が出来たことがよほど嬉しかったのだろう。「仕事をしている仲間と一緒にいることはなんと楽しいことか」⁽⁴⁰⁾と洩らしている。

発行期間は僅か30日に過ぎなかったが『フレンド』紙は予想外の成功を納めた。娯楽に乏しい戦場生活では兵士にとって新聞が唯一の楽しみであったに相違ない。ブルームフォンテインにおけるそれまでの最高販売部数400に対して、毎日平均5000部から5500部⁽⁴¹⁾が売られた。

キプリングがブルームフォンテインで新聞の編集に携わっている最中の3月27日、第一次ボーア戦争でボーア軍に勝利をもたらした英雄で、この戦争でも指揮を取っていたピエット・ジョウバート將軍が落馬が原因で死亡したニュースが伝わると、キプリングは彼を悼む詩 *The Death of General Joubert* を30日の『フレンド』紙に発表した。この詩は後に『ジョウバート將軍』と改題され、詩集 *The Five Nations* に収録された。ジョウバートはトランスバール共和国で先に行われた大統領選挙において下馬評でクルーガーを凌いでいたため、多数の国民がジョウバートの勝利を信じていたほど人望の厚い人物であった⁽⁴²⁾。その温厚で慈悲深い人柄は英国人からも尊敬され、英軍の総帥ロバーツ將軍もクルーガー大統領に弔意を表したほどだった。この時ばかりはボーア人も先を争って『フレンド』紙を手に入れようとしたと言われている。

14日間のブルームフォンテイン滞在中、はじめてキプリングは英国軍とボーア軍との戦闘を目撃した。彼の生涯のなかで戦火をくぐった唯一度の経験であり、それは翌1901年インド人から見たボーア戦争を描いた短篇小説 *A Sahib's War* に生かされている。

伝染病の蔓延はボーア人強制収容所だけではなく、ブルームフォンテイン近辺でもチフスが猛威をふるっていた。キプリングとほぼ入違いの形でブルームフォンテイン入りしたコナン・ドイルは、ロバーツ指揮下の兵士3万人のうち、8千人から9千人が腸チフスに感染していたと報告している⁽⁴³⁾。キプリングも詩『連隊の別れ』のなかで、Bloemfontein ブルームフォンテインをチフスの流行をもじって Bloeming-typoidtein と呼んだほどだった。ケープにあるボーア兵捕虜収容病院で志願して看護婦をしていた英国人女流アフリカ探検家メアリー・キングスリーも1900年6月にチフスにより死亡、ビクトリア女王の愛孫、クリスチャン・ビクター王子も同年10月、プレトリアでやはりチフスで亡くなっている。ドイルは四ヵ月南アで医療活動に従事し、帰国後『大ボーア戦

争』、『南アフリカにおける戦争—その原因と行動』を上梓、これにより爵位を授与された。

ケープ・タウンに戻ったキプリングは再び募金活動のための作詩を依頼された。戦争未亡人、孤児救済基金のコンサートのためのもので、彼は『蛍の光』の曲に新たな詩を付けた。この歌を歌った女性歌手は一晚で400ポンドの収益をあげることが出来た。ケープ・タウンにいるキプリングから送られた電報を彼女は死ぬまで大切に保存していたという。

キプリングは生涯11回南アフリカを訪れているが、やはりセシル・ローズとの親交を抜きには南アでの彼は語れない。1900年4月11日にキプリング一家はケープをあとにするが、同年12月25日、2年前からそうしていたように避寒のため再びケープに帰ってきた。今度はホテルではなく、ローズが彼らのために建てた別荘「ウールサック」が待っていた。以来、ローズが亡くなってからも1908年まで毎年彼らは冬をそこで過ごすことになる。

セシル・ローズについてはいまさら説明はいらない。1853年イギリスで生まれ、転地療養のため南アフリカへ渡りボーア戦争のさなか1902年3月48才でこの世を去った、19世紀を代表する帝国主義者で、南アのダイヤモンド、金産業を支配し、自分の名前を冠した国家（旧ローデシア）を建設、イギリスによるケープからカイロまでの支配を構想した人物である。キプリングは1897年にローズとロンドンで最初に会い、アルフレッド・ミルナー卿と三人で昼食をともにしている。その時、キプリングはアメリカでの新婚生活を終え英国に移り住んで一年、ローズも不本意な形でケープ首相を辞任して一年半が経ち、前途洋々のミルナー—キプリングは前々から彼を尊敬していた—はケープ長官として南アに赴任する直前だった。

南アで再会したキプリングとローズ⁽⁴⁴⁾はすぐに親しくなる。戦争前には、ローズはケープ植民地にある彼の農園やローデシアを案内して歩いた。彼の広大な屋敷の一角に家を建てることを申し出たのもローズだった。「もっとゆっくりしたらいかがですか」⁽⁴⁵⁾というのが、ローズの誘いの言葉だった。キプリングはその住まいを「ウールサック」と名付けた。セシル・ローズは口下手であったという。キプリングの役目はローズの考えを秩序立てて言葉に表すことだった。キプリングの自伝には、よくローズに「僕は何を言わんとしているのか。言ってくれないか」⁽⁴⁶⁾と言われたという思い出が書かれている。

「ウールサック」にはたくさんの人々がやって来た。ローズが最も頻繁に訪れた客であることは勿論のこと、ローズの親友でジェイムソン襲撃事件の主役であるジェイムソン博士⁽⁴⁷⁾もそうだった。この事件はローズが首相の座を追われる原因を作り、ボーア戦争勃発の導火線となった。マフェキング奪回のヒーローで、後にボーイ・スカウトを創設したベイドン・パウエル大佐、ミルナー長官と彼の取り巻き、『心ここにあらず』をロンドンで最初に朗読した南ア巡業中の女優のリリー・ラングトレイなどである。

キプリングは1907年、イギリス人として初のノーベル文学賞を受賞する。しかし、国内では20を超えるボーア戦争賛歌、その攻撃的な帝国主義的精神により、リベラル派の批判に晒され、「帝国

の桂冠詩人」から「殺戮の詩人」の異名を取るようになった。キプリングは1908年を最後にケープ・タウンで「長居をする」のをやめにする。それは、ローズが死に、ミルナーが南アを去り、ジェイムソンも英国に戻るようになったこともさることながら、キプリングにはケープがボーア人国家と連邦制を敷くことがどうしても受け入れられなかった。彼の言葉を借りれば「高い文明が低い文明に身売りするのは忍びな」⁽⁴⁸⁾ かったからだと言えよう。

6. 有島武郎とその時代

キプリングが2ヵ月にわたる南アでのボーア戦争体験を終えて英国に戻り、短篇『戦争物語』、『彼の選んだ道』を『デイリー・エクスプレス』紙に発表した同じ頃、札幌農学校本科最終学年に在籍していた22才の有島武郎は、19才から書きはじめた日記『観想録』に『南亞の国に題す』という一篇の詩を書いた。南アフリカではロバーツ將軍率いる英国軍が、1900年3月にオレンジ自由国の首都ブルームフォンテインを制圧し、5月末に英領へ併合、名前をオレンジ川植民地と変更した後、ちょうどトランスバール共和国の首都プレトリアを占拠した頃だった。七五調のこの詩は、今でもあまり知られていないように思われる。

南亞の国に題す

真白く清き蜘蛛の絲の 外見によらぬ欲の陥穽 もろくかかりし蠅見れば うるさかりける日頃をも 忘れて人は助くるを。

意気ある男子誰か將 火よりも熱き同情を 南亜の義士にそそがざる 瘴氣深き河の畔 獅子昼吼ゆる山の峽 幾星霜の辛酸に からく建て得し自由の土 一度ならず二度までも 人の皮着る英吉利の 為めに逐われて心には 無限の悲痛を裏みつつ 涙を呑みし君が忍 世界を挙て知らずとも 慰め君よ神ぞ知る。

広袤殆三十万 人衆八十六万余 産業よしや挙げずも 民に苛税の負担なく 国勢よしや振わずも 鋤取る腕に自由あり 額に流す玉の汗 隣と交す一微笑 醜き浮世に隔りて 美しかりし桃源を 又かき乱す悪魔の手 今は是迄いざや友 立てや真理を楯にして 自由の犠牲とならばやと 拳国の健児剣により 世界を敵となせし時 龍車に向う蟻螂と 冷罵水より冷かに 世は其暴を笑いしが 嗚呼東洋の東端に 名もなき我が致したる 胸より出でし一滴の 涙を何と君は見し。

嗚呼行け君よ勇ましく 真理の為に死せよかし 自由此世に亡びなば 自由と共に
我党は 豆より小き此星を 去って宇宙に転るべし 東より出て西に入り 我も見君
も望むなる 日と月星のある限り 我君に遇う心地せん 君亦我に教えよや⁽⁴⁹⁾。

戦況は圧倒的に英国軍に有利で、明日にでも戦争は終わりそうな勢いであった。日本の新聞も「英軍、オレンジ国首都を占領」（明治33年3月16日付『国民新聞』）、「英軍偵察隊、トランスヴァールに侵入」（同明治33年5月15日付）、「英軍、首都プレトリアを占領」（同明治33年6月7日付）と詳しく報道していた。そのさなか、ボーア人に限らない同情と支援を寄せたのが武郎であった。

艱難辛苦の果て、やっとボーア人が国を建てたのに、イギリスによって二度（第一次、第二次ボーア戦争を意味する）も国土を狙われる。「世界を挙げて知らずとも 慰め君よ神ぞ知る」。そのことをたとえ世界で誰も知らなくとも、安心せよ、神はご存じである、というくだりを読んでわれわれは、武郎とボーア人がクリスチャンであることを思い出す。それ以上に、ボーア人が宗教上の理由からケープを逃れて彼らにとって未知の大陸内部へ移動（グレート・トレック）し、国を興したという風聞が武郎を感動させたのかもしれない。ここではあまり詳しく述べないが、勿論大移動の原因は宗教だけではない。後に、ボーア人がグレート・トレックを民族意識覚醒の手段として美化しはじめて以降、自らにそう言いきかせ、いつしか神話となったのである。武郎が定山溪で自殺未遂事件を起こしたのは、『南亞の国に題す』を書く一年数ヵ月前のことである。「醜き浮世に隔たりて、美しかりき桃源を、又かき乱す悪魔の手」に、「胸より出でし一滴の」涙を流したのは自分の悲境と重ね合わせてのことだったかも知れない。

明治32年10月15、18日付『時事新報』には南ア史の詳細な記事が連載され、そのなかにオレンジ自由国とトランスバル共和国の概要が合わせて紹介されていた。『南亞の国に題す』のなかで「広袤殆三十万。人衆八十六万余」とあるのは、そこからの情報であったように思われる。新聞ではオレンジ自由国の面積は「四万八千三百二十六哩、人口二十万人（内土人十二万人）」、トランスバルは「十一万九千百三十九哩、百九万人（内土人七十四万人）」⁽⁵⁰⁾であった。マイルを平方キロに換算すると、この「広袤殆三十万」はほぼトランスバル共和国とオレンジ自由国（正確には「オレンジ川植民地」）の面積を合わせた広さに相当する。ただし、人口について有島は白人人口と黒人人口の数字を取り違えている⁽⁵¹⁾。

有島は自由のために戦うボーア人に心から声援を送るが、ボーア人も黒人に対しては自由を奪った加害者であることに気づかなかったのだろう。ボーア人国家は黒人の犠牲のうえに成り立ったという視点が、武郎の意識から欠落している。二度も英国と戦争があったこと、「人の皮着る」と表現したように英国が強国の論理で侵略戦争をしかけたこと、「鉄取る腕」とあるようにボーア人の大半が農民であったこと等を正しく把握していたにもかかわらず、黒人に関しては理解に欠けていた。

興味深いのは、武郎の持つ南アフリカのイメージであろう。「瘴気深き河の畔 獅子昼吼ゆる山の峡」、川は熱病を起こさせるような悪い湿気がたちこめ、谷間からライオンの遠吠えが聞こえる。コンゴを舞台にしたジョセフ・コンラッドの『闇の奥』(1898-99)に描かれた場面と似ているのが面白い。武郎はちょうどその頃、友人の森本厚吉とウィリアム・ブレイキーの『デイヴィッド・リヴィングストンの生涯』の翻訳を中心に、リヴィングストンの伝記を一年がかりで纏めている最中でもあった。従ってリヴィングストンの探険記にでてくる40年前のザンベジ川上流地域と混同したのかもしれない。

有島武郎が『南亞の国に題す』を著わした時には、彼はいつか日本が「蟻螂の斧、龍車に向かうかまきり」になろうとは思わなかっただろうし、またかまきりが龍車を倒すなどとは思ってもよらなかったに相違ない。ひたすらボア人に共鳴し、いささかセンチメンタルな詩を詠んだ武郎であった。だが、数年後留学先のアメリカで経験した、日露戦争に勝利した日本に対する冷ややかな西洋の対応に、彼は「基督教國の人の心は荒野のようであるのを見」⁽⁵²⁾る。鬱積していたキリスト教徒への不信感は決定的なものとなり、武郎はキリスト教そのものと決別する道を選択することになる。

もう一人、ほんの少しだがボア戦争とかかわった日本人の作家がいた。夏目漱石である。1900年10月29日、ロンドンでは誰もが間もなく戦争が英国側の勝利に終わることを信じて疑わず、街では南アから帰還した兵士を歓迎する熱狂的なムードに満ち溢れていた。この凱旋パレードに図らずも巻き込まれたのが、イギリス留学のためパリからロンドンに到着したばかりの夏目金之助、漱石であった。前日の夜にロンドンに着いた彼にとってはその日が実質的な英国生活第一日目に当たった。漱石は日記にこう記している。

十月二十九日 岡田氏ノ用事ノ爲め倫敦市中ニ歩行ス方角モ何モ分ラズ且南亞ヨリ歸ル義勇兵歡迎ノ爲メ非常ノ雜沓ニテ困却セリ夜美野部氏ト市中雜沓ノ中ヲ散歩ス⁽⁵³⁾

初めての土地でしかも外国である。漱石がそれこそ maffick 状態の街で右も左も分からずに往生した様は想像に難くない。

もう一つ意外なことに漱石は『永日小品』⁽⁵⁴⁾のなかでトランスバール大統領クルーガーについて言及している。

顔中は腫れ上った様に膨れている真中に、ずんぐりした肉の多い鼻が寝転んで、細い眼が二つ着いている。南亞の大統領にクルーゲルというのがあった。あれによく似ている。すっきりと心持よく此方の眸に映る顔ではない。其の上娘に対しての物の云い方が和気を欠いている・・・⁽⁵⁵⁾

言及といっても登場人物の容姿と何処か胡散臭く乱暴な性格を寸描するのに「クルーゲルのよう」⁽⁵⁶⁾であると書いたに過ぎないが、この好ましからざる人物のイメージは、まさにキプリングが描いたクルーガーであり、南ア問題が表面化して以降英国で報道されたボーア人像であった。

クルーガーや一代で財を築きあげた帝国主義の申し子セシル・ローズは、今では忘れ去られた存在だが、ボーア戦争当時は日本でもよく知られていた。開戦前から南アの状況は詳しく新聞等で報道され、戦争突入後は刻々と戦況が伝えられていたことは先にも述べたが、南アに関する書籍もまた次々に出版された。伊藤博文の秘書長田秋濤の訳した『金剛石の原野』(1899年)、トランスバール共和国の誕生までを述べた福本日南の『新建国』(1900年)、吉田栄右の翻訳による『杜国大統領クルーゲル』(1900年)、森皚峰纂訳『セシル・ローズ帝王流豪富譚』などがその例である。『杜国大統領クルーゲル』には扉に椅子に座って盛装したクルーガーの写真が配され、その他クルーガー邸や夫妻、彼の宿敵セシル・ローズやロバーツ將軍の写真まであった。南アを中心にアフリカを探検・調査したリビングストンの記録や、南アを舞台にしたライダー・バガード等の小説もすでに翻訳されていた。ボーア戦争後は陸軍参謀本部が南アへ大尉を派遣したり、「ボーア戦争調査委員会」を発足させるなど、戦略、戦法が盛んに研究され、『英杜戦争勝敗の原因』といった類の書籍の出版が相次いだ。マダガスカル島への移民の可能性を探る調査を含めて、南部アフリカは、にわかに日本の関心を引くことになった。有島武郎、福本日南のような小国への同情と、陸軍参謀本部のような帝国主義者の思惑が混在していたのが、19世紀末から20世紀初頭の日本であった。

結びにかえて

戦争反対、支持のいずれの立場をとろうと、イギリスでは多くの文化人がボーア戦争にかかわった。終始戦争反対の根強い声はあったが、一旦戦争が始まると新聞報道やミュージック・ホールが偏狭的爱国心を扇動し、大衆を巻き込んだジンゴイスティックなムードが大勢を占めた。なかでもキプリングは、20以上にのぼる数々のボーア戦争関連詩を書いた。南アではロバーツ將軍が発案した軍事新聞『フレンド』紙の編集にも参加した。従軍記者として戦線にも出向き、初期のゲリラ戦を目撃した。作家として絶頂期にあった人物の戦争への関与は、はかり知れない影響があったに違いない。留守を守る出征兵士の家族を支援する基金を募るために書いた『心ここにあらず』は、歌にもなって英国だけではなくオーストラリアでも大流行し、街には Gentleman in khaki の商品が溢れ、ちょっとした社会現象にまで発展した。

戦争の進捗に合わせて書かれる他の作家の大衆小説、冒険小説は、いやがうえでも帝国への熱狂的忠誠心を鼓吹する。G・A・ヘンティの『ナタールのブルーラーとともに』(1901年)、『ロバーツと一緒にプレトリアへ』(1902年)はその代表的なもので、そこでは類型的なボーア人イメージ、すなわち文明の高みにいる道徳的な英国人の対極としての不潔で無知で野蛮な民族像、が繰り返しか

られる。ヘンティの作品は当時年間15万部出たといわれており、彼のアフリカ物6巻、その内3冊がボーア戦争に関するものであったが、発行部数は全部で351万部⁽⁵⁷⁾を数えた。その大量生産される帝国主義、対外強硬主義にいち早く警鐘を鳴らしたのが、J・A・ボブソンであった。彼は、「偏り、隷属的で、有害な新聞・雑誌がジンゴイズムを製造する最大の牽引力であり、ジンゴイズムとは「自国を愛する気持ちが他国を嫌う気持ちや他国の人々を滅ぼしたいとする強烈な願望に変わった歪んだ愛国心」⁽⁵⁸⁾であると述べた。

日本でもボーア戦争は詳しく報道されていた。明治33（1900）年6月、有島武郎は南アで英軍がトランスバールの首都を制圧し、オレンジ自由国をケープ植民地に併合したニュースを新聞で読み、帝国主義に翻弄されるボーア人に心情を重ねた詩『南亞の国に題す』を創作する。英国におけるボーア人のイメージとは180度異なるボーア人観がそこにあった。しかし、ボーア人の延長線上にあった武郎の白人キリスト教徒観は、日露戦争を境に変化していく。

日露戦争を契機に、日本は名実ともに強国、列強の仲間入りを果たし、歴史の大きな転換期を迎えた。領土拡張が民族主義的、帝国主義的価値観によって正当化されるという道を歩みだす。同様に、ボーア戦争はイギリス近代史のなかでも転換期を画した。たかが局地戦争のはずが、米国にとってのベトナム戦争にも匹敵する損失を英国に与えた。欧州、東洋双方への艦隊の維持は無理となり、日英同盟の締結に追い込まれる。輝かしい大英帝国の絶頂期からの転落を促すきっかけとなった。

南アフリカも、ボーア人は戦争に負けたものの、民族の独自性は守りぬいた。とりわけ英国側が主張したボーア人国家内の黒人に対する参政権付与を突っぱねた。戦争により英国人系とボーア人との亀裂が決定的なものとなったのは言うまでもなく、英国が勝てば国政に参加できると信じ、英軍に加担したボーア人領地内の黒人の期待も、見事に裏切られた。産業での労働力不足から中国人労働者の移入や、焦土作戦によって畑を失ったブアホアイト（貧しいボーア人）を保護するため黒人に対する締付けが一層強化され、国内は後のアパルトヘイト政策の根幹となる制度が形づくられていった。

《註》

- (1) もともとは農夫をさすオランダ語で、南アフリカでは白人の農夫を意味したが、19世紀になるとオランダ系白人の総称となった。現在はアフリカーナと呼ばれる。
- (2) Sheila Patterson, *The Last Trek* (London, 1957), p.31.
- (3) Byron Farwell, *The Great Anglo-Boer War* (New York, 1976), p.353.
- (4) Ibid.
- (5) Patterson, p.34; T.R.H.Davenport, *South Africa: A Modern History* (Bergvlei, 1989), p.217.
- (6) Lawrence James, *The Savage Wars* (London, 1985), p.64.

- (7) Patterson, p.34.
- (8) Leonard Thompson, *A History of South Africa* (New Haven, 1901), p.221.
- (9) クルーガーはいざとなったらドイツが介入するものと期待していた。意外だが、彼は各国からの義勇兵志願に対してははじめは冷ややかな態度を取っていた。
- (10) Farwell, pp.252-255.その他にも僅かだが英軍からボーア側に寝返りを打った英国人もいた。アメリカからの志願兵は大半がアイルランド系で占められていた。
- (11) Ibid., p.145.
- (12) C.F.J.Muller ed., *Five Hundred Years--A History of South Africa* (Pretoria, 1989), p.361; Thompson, p.142.
- (13) Farwell, p.40.
- (14) Ibid., p.374.
- (15) Rudyard Kipling, *The Five Nations* (London, 1918), p.111.
- (16) Ibid., p.110. なお、キプリングの『古きことがら』については大澤吉博氏の『ナショナリズムの明暗』(東大出版会)に詳しい。
- (17) Milner's 'Helots Dispatch' quoted in *The Great Anglo-Boer War*, p.33.
- (18) Renee Durbach, *Kipling's South Africa* (Cape Town, 1988), p.32.
- (19) 平川祐弘訳『和魂洋才の系譜』(河出書房新社)、161頁より引用。
- (20) 創刊4年後の1900年には、つまりキプリングが『心ここにあらず』を書いた翌年には、発行部数は百万部に達した。Ben Shephard, 'Showbiz Imperialism' in John M. MacKenzie ed., *Imperialism and Popular Culture* (New York, 1986), p.108.
- (21) Durbach, p.31.
- (22) Ibid., p.41. キプリング自身は詩情に欠けた詩であったと後年語っている。
- (23) Ibid.
- (24) Farwell, p.54.
- (25) John M. MacKenzie, *Propaganda and Empire* (New York, 1984), p.58.
- (26) 井野瀬久美恵『大英帝国はミュージック・ホールから』(朝日選書、1990年)、10頁。
- (27) MacKenzie, p.31.
- (28) Ibid., pp.33-34.
- (29) 井野、344頁。
- (30) Durbach, p.41.
- (31) Ibid., pp.47-48
- (32) Farwell, p.249.
- (33) ロバーツ將軍は1週50ポンドを支払うことを申し出た。Durbach, p.49.

- (34) 4人のスタッフは次の通り。H.A. Gwynne (ロイター)、Perceval Landon (タイムズ特派員)、Julian Ralph (米国人、ロンドンのデイリー・メイル特派員)、F.W. Buxton (ヨハネスブルグ・スター)
- (35) Thomas Pakenham, *The Boer War* (New York, 1992), p.396.
- (36) Ibid., p.398.
- (37) Marq de Villiers, *White Tribe Dreaming* (New York, 1988), p.230.
- (38) 英軍の兵士の三分の二はスコットランド人とアイルランド人であった。
- (39) ボーア人のエリートは日常は英語を用いると先に述べたが、その一例として、キプリングの *St. Patrick's Day* が『フレンド』紙に掲載された当日、フランシス・ライツ前オレンジ自由国大統領―当時はクルーガーの片腕でトランスバール共和国総務長官―は替え歌を英語で即興で作った。また彼の息子、デニス・ライツ (後のスマッツ政権時の閣僚) は、17才で入隊し、膨大なボーア戦争日誌を書き残したが、その日誌を自分で英訳し (*Commando--A Boer Journal of the Boer War*) 1929年に英国で出版している。
- (40) Durbach, p.51.
- (41) Ibid., p.52.
- (42) Earl Buxton, *General Botha* (London, 1924), pp.3-4.
- (43) Farwell, p.241.
- (44) 現在でも有名なオクスフォード大学の「ローズ・スカラーシップ」は、彼の晩年に設立された。彼の野望を教育を通じてイギリス、英植民地、アメリカ、ドイツの優秀な人材を育てることで達成しようとした。
- (45) Felix Gross, *Rhodes of Africa* (London, 1956), p.247.
- (46) Rudyard Kipling, *Something of Myself* (London, 1936), p.135.
- (47) ジェイムソン博士はローズの最後を看取っている。ローズの有名な辞世の言葉「為したる事の如何に少なくして、為すべき事の如何に多きを」はジェイムソンの手を握りながら語ったと伝えられている。
- (48) Durbach, p.98.
- (49) 有島武郎『観想録』、『有島武郎全集』(叢文閣、1925年) 第11巻、277-278頁。
- (50) 明治32年10月18日付『時事新報』
- (51) 実は『時事新報』の人口に関しては正確を欠いている。新聞では白人43万人、黒人86万人となっているが、南アの1904年の統計によると、オレンジ自由国の人口は、白人14万3千人、アフリカ人22万5千人、その他1万9千人、合計38万7千人、トランスバール共和国は、それぞれ29万7千人、93万7千人、3万5千人の計126万9千人で、白人人口は44万だが、黒人人口は両国合わせると116万2千人ということになる。(出典: Donald Denoon, *Southern Africa Since 1800*, p.113)
- (52) 有島武郎『リビングストーン傳』の序、『有島武郎全集』第6巻、69頁。

- (53) 夏目漱石『漱石日記』（『漱石全集』第16巻、岩波書店、1928年）、16頁。
- (54) 『永日小品』は、明治42年元旦から2ヵ月間東京、大阪朝日新聞に連載されたもので、虚実とり混ぜて
身辺雑記ふうに綴られた25の小篇よりなる。
- (55) 『永日小品』のなかの『下宿』より引用。夏目漱石『永日小品』（『漱石全集』第13巻）72頁。
- (56) 同じく『過去の匂ひ』76頁。
- (57) Jeffrey Richards ed., *Imperialism and Juvenile Literature* (New York, 1989), p.103.
- (58) J.A. Hobson, *The Psychology of Jingoism* (London, 1901), p.125.